

アクティブ・ラーニングにおける学生のコミュニケーション能力の育成

中西 希和

The development of students' communication skills in Active Learning

Kiwa Nakanishi

キーワード：イベント、コミュニケーション能力、学生、アクティブ・ラーニング

Key Words : events, communication skills, students, Active Learning

要約：企業は学生にコミュニケーション能力を求めており、コミュニケーション能力の高い人材が社会で活躍する可能性が高いと考えている。そして短大・大学は学生が就職に向けて、在学中に企業が求めるレベルまでコミュニケーション能力を育成することが求められ、多くの短大・大学では学生のコミュニケーション能力育成を目的としたアクティブ・ラーニング型の授業を行っている。本稿では、イベントを通して、学生のコミュニケーション能力育成のための、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の試みとその成果と課題を考察する。

Abstract : Employers seek communication skills in students, and think that there is a high possibility that human resources with high communication skills will be active in society. And junior colleges and universities are required to nurture students' communication skills to the level required by employers during their studies for employment. Accordingly many junior colleges and universities practice Active Learning classes designed to develop students' communication skills.

The purpose of this study is to examine the attempts of Active Learning classes for the development of students' communication skills through events, their results and issues.

はじめに

一般社団法人日本経済団体連合会の調査によると、企業が選考にあたって特に重視した点は「コミュニケーション能力」が 16 年連続で第 1 位となっている。経済産業省の調査においても企業人事採用担当者は「社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素」として「コミュニケーション能力」を必要な能力要素と考えているという結果が出ている。また、厚生労働省は企業が若者に求める就職基礎能力として「職業人意識」、「基礎学力」と並び「コミュニケーション能力」を挙げている。このように企業は学生にコミュニケーション能力を求めており、コミュニケーション能力の高い人材が社会で活躍する可能性が高いと考えている。そして短大・大学は学生が就職に向けて、在学中に企業が求めるレベルまでコミュニケーション能力を育成することが求められ、多くの大学では学生のコミュニケーション能力育成を目的としたアクティブ・ラーニング型の授業を行っている。

他方、イベントはコミュニケーション・メディアとしての機能を持ち、社会的なコミュニティ活動、地域的なコミュニティ活動を活性化していくための効果的な手段として注目され、実施されている。本学文化表現学科では、これまで「プレ・ボランティア」や「ボランティア活動」等の授業を通して、新所沢団地自治会開催の様々なイベントに参加し、自治会や団地住民の方々との交流を図ってきた。地域イベントは様々な目的を達成する手段とし、住民が参加することによって実施されるが、計画や実施等の段階において関係機関や住民が協力し合うことでコミュニケーションが活発になり、互いの理解が深まるという効果が期待されている。地域イベントの場合は、何をどう作っていくのか、どのような人たちが、どのようなやり方で作っていくのかという「プロセス効果」により、コミュニケーションが活性化していくとされている¹⁾。

本稿では、「イベント・プランニング」の授業内で行った学内イベント、新所沢団地自治会主催のコミュニティサロン「ぐりーんぽけっと」に季節を感じさせる飾りつけとして行った七夕リース制作、新所沢団地自治会主催の桜まつりでのアクセサリーづくりのワークショップ、「イベント・マネジメント」の授業で行ったクリスマス・リース制作を取り上げ、イベントを通して学生のコミュニケーション能力の育成を目指した、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の試みとその成果と課題を考察する。

1. コミュニケーション能力の重要性とアクティブ・ラーニング

1-1. コミュニケーション能力育成の重要性

一般社団法人日本経済団体連合会が 2018 年に行った、「新卒採用に関するアンケート調査結果」²⁾によると、企業が選考にあたって特に重視した点は「コミュニケーション能力」が 16 年連続で第 1 位、「主体性」が 10 年連続で第 2 位、「チャレンジ精神」が 3 年連続で第 3 位となっており、多くの企業が大卒の新卒者を採用選考する際に「コミュニケーション能力」を重要視している結果が出ている。

また、株式会社ダイドードリンコによる「ダイドー働く大人力向上委員会」が 2014 年、20～50 代の男女 1000 人を対象に行った「職場コミュニケーションに関する意識調査」³⁾によると 46.7%が、新入社員が入って来ることに不安を持ち、約 6 割以上が若手社員に不満を持っているという結果が出ている。新入社員に対して不安を感じる点としては「何を考えているかわからなさそう」が 40.0%で一番多く、続いて「上手くコミュニケーションがとれなさそう」が 38.8%となっている。若手社員に不満を感じる点としては、「指示するまで動かない」、「他人の話を受けない・理解しない」が 26.9%と一番多く、続いて「何を考えているかわからない」が 24.7%、「反応が薄い」が 24.6%、「上手くコミュニケーションがとれない」が 19.9%という結果になっている。

経済産業省の「大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査」⁴⁾ (2010 年)によると、「社会に出て活躍するために必要だと考える能力要素」として企業人事採用担当者は「人柄 (明るさや素直さ等)」(20.0%)、「コミュニケーション能力」(23.1%)を必要な能力要素と考えており、学生も、「人柄 (明るさや素直さ等)」(22.6%)、「コミュニケーション能力」(21.6%)を必要な能力要素と考えていることから、企業・学生ともに「人柄 (明るさや素直さ等)」「コミュニケーション力」を必要な能力要素と考えていることがわかる。その一方で、企業側が学生に不足していると思う能力要素を調査した結果は「主体性」(20.4%)、「粘り強さ」(15.3%)、「コミュニケーション力」(19.0%)が多くなっているのに対し、学生側が自分に不足していると思う能力要素としては「語学力 (TOEIC・日本語力など)」(16.5%)、「業界に関する専門知識」(11.8%)、「簿記」(10.2%)が上位になっており、企業側が学生に不足していると思う能力要素として上位に挙げた「主体性」、「粘り強さ」、「コミュニケーション力」についてはそれぞれ、5.6%、3.0%、8.0%という低い結果となっており、企業側が学生に求めている「主体性」、「粘り強さ」、「コミュニケーション力」よりも、学生は専門知識や技術などが求められていると考えており、両者の考え方と求めるレベルに大きな差異があることがわかる。

また学生が、自分が既に身につけていると思う能力要素として「人柄 (明るさや素直さ等)」(20.0%)、「粘り強さ」(16.8%)、「チームワーク力」(12.8%)を挙げている。これに対し、企業側は、学生が既に身につけている能力要素として「ビジネスマナー」(24.7%)、「人柄 (明るさや素直さ等)」(16.5%)を挙げているものの、「粘り強さ」、「チームワーク力」についてはそれぞれ 0.8%、2.4%と低い数値となっており、学生が既に身につけていると思う能力要素について企業側はそのレベルに達していないと考えていることがわかる。

このような企業と大学生の認識の差異については、加藤氏ら⁵⁾の調査によっても明らかギャップがあり、自主性、主体性、コミュニケーション能力の中で、企業の評価では学生のコミュニケーション能力への評価が一番低いということが明らかにされている。また、加藤氏らは 2014 年において、10 年前に比べて新人研修の期間が伸びている企業が 48%あり、これはコミュニケーション能力に関連する内容の補習時間が伸びているためであり、

企業が新卒採用者に対して不安を感じることを示唆しているとしている。

1-2. アクティブ・ラーニング

コミュニケーション能力育成のために、高等教育においてアクティブ・ラーニングを取り入れた授業が多く行われている。例えば教職課程科目に理論と実践を調和させることを目指したスタイルを取り入れた白鳥氏⁶⁾、教職課程の体育実技授業に協同学習を取り入れた谷本氏⁷⁾、具体的な地域課題の調査・分析、提言や地方紙との協働などアクティブ・ラーニングによる学外教育を取り入れた丸山氏⁸⁾、グループ内で自他のアイデアを共有させ、ものづくりを通してコミュニケーションの大切さを学習させた藤本氏ら⁹⁾など、多くの研究が挙げられる。

アクティブ・ラーニングとは、教員からの一方向的な講義による教育ではなく、学生が能動的に学習することにより、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る教授・学習法の総称である。方法としては発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなどがある¹⁰⁾。

2006年、経済産業省は「社会人基礎力」¹¹⁾を提唱した。これは「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」としており、この社会人基礎力を養成するために、能動型の授業によって学生が主体的に学ぶアクティブ・ラーニングが推進されている。

2. 学内イベント

2-1. 「イベント・プランニング」について

本学の「イベント・プランニング」の授業はコミュニケーション・メディアとしての役割を持ち、コミュニティ活動を活性化していくための効果的な手段として注目されているイベントについて理解し、企画することにより、アイデアを生み出し、それを説明して提案する力を身につけることを目指す授業である。平成28、29年度の授業において「ぐりーんぽけっと」内の季節を感じさせる飾りつけとして七夕リースを制作したが²⁾、平成30年度はさらに学生の企画・アイデアを取り入れた七夕リース制作を行った。またこの授業ではイベントのプログラムを企画するのが目標であるが、より具体的な企画案を考えるためにはイベントの企画、計画実行の体験が必要であると考え、小規模な学内イベントを行っている。実施したいイベントに関するアンケート等を取りながら、内容の細部について検討し、決めていく。平成28、29年度はバドミントン大会を行い、グループ編成、役割分担、ゲームのやり方などはすべて学生が考えて進めた。

2-2.学内イベントの内容と事前の準備

平成 30 年度においては様々な意見が出され、大別すると①カードゲーム大会、②アクセサリ・小物作り、③お菓子作り・パーティー、の 3 つの意見に分かれた。履修学生 27 名のうち①の「カードゲーム大会」が最も多く、次いで②、③の順に多かった。希望するグループごとに具体的な内容について話し合った結果、カードゲーム大会に決定し、新所沢団地の「ぐりーんぽけっと」に飾る七夕リースにつまみ細工を取り入れ、さらに秋草祭でつまみ細工を使ったアクセサリ制作・販売を行うことになった。

カードゲーム大会を行うために、履修学生全員を暫定的なグループに分け、ブレインストーミングにより、チーム分け、ゲームの種類、進め方、時間などについてアイデアを出して話し合い、各グループの意見をまとめて決定した。

各グループの中で審判・タイムキーパー、道具準備、スコアボード等の係を決め、全員で役割を分担し、準備を行った。審判係はゲームのルール決定、説明、ゲームの審判、道具準備係は必要な道具の準備、各チームで色を決め、チームメイトのブレスレットを制作、スコアボード係はスコアボードの作成、当日の対戦結果の記入、集計、順位決定を行った。当日は予想以上の盛り上がりを見せ、和やかな雰囲気で行われ、イベントとしても成功したと感じている。

2-3.学生の反応

カードゲーム大会を振り返り、「企画・計画について」「事前の準備について」「当日について」「この企画を実行してみて学んだこと、考えたこと」の項目でアンケートを行った。

企画・計画については「講義を受けている全員に案を出してもらい、そこから絞り込む形式は平等で良いと思った」、「みんなで計画をするのが良かった」、「案を出すのが難しかった」等の感想があり、多くの意見を出すことの必要性やそれをまとめていくことの難しさを感じたようであった。自分やグループの考えた案に決まった学生は「自分の考えた案がこのような形になり、楽しかった」と企画が通ることの楽しさや嬉しさも感じたようであった。ゲームの種類や内容については、「カードゲームは誰でもやったことがあるものだったのでわかりやすく、やりやすいゲームだったと思う」、「ゲームがとても面白かった」という意見があり、さらに「今回のゲームの他に、皆が知らないようなゲームも企画すればバリエーションが広がったと思うが、知っているゲームだったのでスムーズに出来たことは良かったと思う」、「1 ゲームの制限時間を設けることによって大会全体がよりスムーズに行われていたと思う」と、イベント全体の流れを考えた意見も見られた。

事前の準備については「チームに分かれ、その中で役割分担をして 1 人ひとりやることがあったので、全員がこの大会に参加していてよかった。コミュニケーションもしっかりとれていて、準備もとても楽しかった」等、全員が何かの役割を担当し、その担当ごとに分かれて話し合いをして決めたことで、1 つの作業に集中でき、任された仕事をきちんと

こなせたという達成感や役割分担の大切さを感じたようであった。

事前にルール説明を行ったことについて「ルールの説明が事前にあったので、混乱することがなくスムーズにできたと思う」、「ルールを記載した紙が黒板に貼ってあるのは、ルールを理解できていない人にはとても良かったと思った」等、好評であったが、全員の理解に至っていなかったこともあり、「一度練習として一戦やった方が良かったと思う」、「各テーブルにもルール説明の用紙があったら良かった」という意見も見られた。しかし「わからない場合は仲間同士で助け合いながら出来ていたことが良かったと思う」という意見もあり、全員が完璧に理解していたらさらにゲームを楽しむことができた可能性がある反面、チーム内で助け合う場面が見られなかった可能性もあるため、完璧に準備することがすべて良い方向に繋がるわけではない場合もあることがわかった。またチームごとのブレスレットを制作したことについては「チームカラーのアクセサリを作るのはとても良いと思った。団結力が高まった。」という意見が見られ、誰がどのチームなのかが分かり、チームカラーを相談したりすることが、交流が生まれるきっかけとなったことがわかった。

当日は、「流れを把握できず、スムーズに動けなかった」等、始まりがスムーズでなかったが、動き始めると計画をしっかりと立て、準備に時間をかけたこともあり、順調に進行し、時間内に終わることができた。ゲームの種類はくじで決めたが、「くじでゲームを決めると、同じゲームばかりする確率がでてしまう。他のゲームもしたかった」という意見から、様々な種類のゲームが出来るような方法を考える必要があることがわかった。しかし、「十分に楽しめるような大会の構成になっていたのでみんなとても楽しそうだったし、自分も楽しかった」、「皆が笑顔で楽しめていた」等の意見が多く、チームから選抜で戦う形式であったが、試合を見ているのも面白く、楽しめたようであった。

この企画を実行してみて学んだこと、考えたこととしては「事前の準備が重要である。みんなの協力がないと進まない」、「準備をしている時からハプニングはつきものなのだと感じた。実行してみて何が足りなかったのか、といった改善点が見つかり、次へと活かしていく。このサイクルがイベントの企画、実行の醍醐味なのだと気づいた」等の意見が見られた。事前の準備が重要であり、計画を立てていても実際に行ってみると改善点が見つかり、臨機応変な対応が必要である、というイベントの企画・計画において重要であり、筆者が授業で伝えたかった本旨は大方伝わったようであり、イベント実行を通して授業内容の体験的理解を深めることにつながったといえる。また「たくさんの人とコミュニケーションをとることが出来たし、全員が楽しめたと思うので良かった。準備もみんな協力してできたので大変なこと、頭を使うこともあったけれど楽しかった」等の意見も見られ、イベントの持つコミュニケーション・メディアの機能を改めて確認することができた。

3.七夕リース制作

3-1 つまみ細工でのリース制作

平成 28 年度の前期授業「イベント・プランニング」より、新所沢団地自治会の「ぐりーんぽけっと」内で季節を感じさせる飾りつけとして、七夕リースの制作を行っている。

平成 30 年度においては前述のカードゲーム大会を行い、グループ内で協同作業をすることによって少しずつ交流を深め、同じグループで七夕リース制作を行った。

七夕リース制作においては、前述のように学生の意見を活かし、つまみ細工を使ったリース制作を行った。つまみ細工とは江戸時代に生まれた手工芸とされており、小さく切った生地を使い、折ってピンセット等でつまむようにして接着させながら花びら等を制作するものであり、髪飾りなどに使用される。様々な手法があるが、比較的作りやすく、作り方も覚えやすい「丸つまみ」の手法 1 つに絞った。作り方は、ひなぎく著『いちばんやさしいつまみ細工の手習い帖』¹²⁾を参考にした。まずは作り方を覚えるために「丸つまみ」による花の制作を行い、それから七夕や夏らしい季節感を出すために笹の葉の造花やオーガンジーなどの薄めの布やリボンも使用してリース制作を行った。学生は熱心に制作に取り組み、グループごとに工夫が凝らされた七夕リースが完成した(図 1)。

後日、リースを「ぐりーんぽけっと」に学生と飾りつけに行ったところ、何人ものお客様がつまみ細工に興味を持った様子で話しかけてくださった。つまみ細工の他の作り方やご自分が作られた話をしてくださり、学生が制作した七夕リースをきっかけとして住民の方と学生がコミュニケーションを取ることができた。話しかけてくださったお客様は席に戻ってからもお客様同士でつまみ細工の話をされており、会話を弾ませていらっしやった。

3-2.秋草祭での出展

3-2-1.出展内容

今回完成した七夕リースが非常に良い出来栄であったため、「ぐりーんぽけっと」を訪れる方々だけでなく、もっと多くの方に見て頂きたいと思い、また前述のように学生の意見にあったことから、秋草祭で応用してつまみ細工を使ったアクセサリー制作・販売を行い、その際に学生が制作した七夕リースも展示することにした。秋草祭ではつまみ細工のストラップ、バレッタ、ヘアピン、ヘアゴム等のアクセサリーの販売とその場で作ることが出来るワークショップ、他に平成 28、29 年度の「イベント・マネジメント」の授業で制作したクリスマス・リースの展示も行った。授業で練習を兼ねて制作したつまみ細工の花が残っていたため、それらを利用してアクセサリーを制作し、また数名の学生が空き時間などを利用して制作を行った。

3-2-2.ワークショップへの応用

秋草祭のワークショップには様々な方が参加してくださると想定し、つまみ細工の要素は残しながらも、細かい作業や制作時間は少なくする必要があった。花を制作する場合、まず 6 枚の花びらを作り、土台の上に花びらをのせて貼りつけていく。基本的な「丸つま

み」の方法で花びらを作ることにしたが、作業が単調であり、時間もかかるため、花びらや土台は既に形を作ったものを事前に準備しておき、参加者は様々な柄の花びらの中から選び、また土台も既に作ったものから選んで制作することにした。したがって参加者はある程度好みの色や柄を選んでオリジナリティを出し、かつ短時間で制作することができる。当日は制作したアクセサリーの約 80% を販売し、ワークショップにも多くの方に参加して頂き、授業制作作品を見学して頂くことができた。

4.新所沢団地自治会主催の桜まつりでのワークショップ

前述のように、「イベント・プランニング」ではより具体的な企画案を考えるために学内でイベントを実施し、イベントのプログラム内容を企画するのが目標である。

平成 27 年度から新所沢団地自治会主催の桜まつりへ参加し、アクセサリー作りのワークショップを行っているが、平成 28 年度からは「イベント・プランニング」の授業内において、年度末の桜まつりでのワークショップについての企画を考え、発表する時間を設け、その中から内容を決定している。平成 28 年度はプラバンを使ったアクセサリー作り、平成 29 年度はペットボトルのキャップを使ったアクセサリー作りを行った。

4-1.プラバンアクセサリー作り（平成 28 年度）

プラバン（プラスチックの板の略）の材質は OPS 樹脂（二軸延伸ポスチレンシート）であり、縦と横の二方向へ延伸する加工が施されている。薄く延ばして固めてあるが、加熱することで元の状態へ縮み、厚みのある状態へ戻ろうとする性質を利用してアクセサリー作り等を行うことができる。1980～90 年代に小学生の間で流行した。作り方は、文化出版局編『型紙をなぞって焼くだけでできる プラバンアクセサリー』¹³⁾を基にした。プラバンの裏にやすりをかけて着色しやすくし、絵を描き、色鉛筆やポスカ等のペンで色を塗る。はさみで形を切り抜き、オーブントースターで焼いて縮ませ、アクセサリーの金具を接着剤でつけて完成する。この方法でストラップまたはブローチを材料費として 100 円で制作できるというワークショップを 5 名の学生と行った（図 2）。当日は雨が降り、接着剤が濡れにくいという問題はあったが、焼く時にプラバンが変形する様子を楽しむ参加者もあり、全体的に楽しんで頂けたと考えている。悪天候の中、約 60 名の方に参加して頂いた。

4-2.ペットボトルのキャップを使ったアクセサリーづくり（平成 29 年度）

平成 29 年度はペットボトルのキャップにビーズや造花、紐やリボン、フェルトを巻いた厚紙等を使い、帽子の形をしたストラップまたはブローチを材料費 100 円で制作するワークショップを行った。これも「イベント・プランニング」の授業内において学生が企画した内容である。8 名の学生とワークショップを行った（図 3）。

当日は非常に天候が良く、85 名の方に参加して頂くことができた。参加者の多くは小学

生の子どもであったが、デコレーションにこだわり、ビーズや造花などを多く使い、非常に凝った作品が出来上がっていた。もう 1 つ作りたいと複数作る参加者の方もいた。

当日、スタッフの学生は多くの参加者が集まり、並ぶ列も出来ている中で、呼び込みと受付、制作指導に上手く役割分担しながら、スムーズに参加者の対応を行っていた。学生同士の交流も深まったようであった。



図 1 「ぐりーんぽけっと」に飾ったセタリース



図 2 「プラバンアクセサリ」



図 3 「秋草学園短期大学によるワークショップ
ペットボトルキャップでアクセサリ作り」



図 4 クリスマス・リース

5. 「イベント・マネジメント」でのクリスマス・リース制作

5-1. リースの作り方

「イベント・マネジメント」の授業では、地域交流を目的とし、新所沢団地住民の方々と一緒にクリスマス・リースの制作を行っている。ハギレ布を使って 1 人ずつ中にわたを詰めたボール状のものを作り、それをつなぎ合わせ、協同作業で 1 つのリースが完成する。平成 28 年度にリースを制作し、「ぐりーんぽけっと」でクリスマスの飾りつけを行った時、参加者から、制作したリースを自宅に飾りたいという意見があり、平成 29 年度は参加者から材料費として 100 円を集め、完成したリースを持ち帰ることが出来るようにした。

作り方は、中をくり抜いたドーナツ状の厚紙を型紙とし、布の裏面に型紙を置き、外側の円と内側の円に鉛筆で印をつけ、布に二重の円を描く。外側の円に沿って布をハサミで切り、内側の円の裏側から針を入れ、2mm 間隔で並縫いで縫っていく。1 周したら、2~3mm 重ねて糸を表側に出し、糸を強く引っ張ってギャザーを寄せ、中にわたを入れて糸を

強く引っ張り、縫い綴じる。このボール状のものを 1 人ずつ制作し、約 18 個つなげて 1 つのリースにしていく (図 4)。イベント前の授業中にこの制作方法で練習し、学生が参加者に作り方を説明できるように備えた。

5-2. 学生の反応

クリスマス・リース制作のイベント当日は、告知が直前であったにもかかわらず、約 13 名の方が参加してくださり、テーブルを囲んで学生と住民の方が交互に着席し、学生が説明しながらリースの制作を行った。イベントは非常に盛り上がり、楽しくお話をしながら交流することができた。翌週の授業でこのイベントを振り返り、「事前の準備について」、「参加者の方に作り方を教えることができましたか?」、「参加者の方に積極的に話しかけることができましたか?」、「参加者の方は作り方を理解できていましたか?」、「参加者の方は楽しそうでしたか?」、「あなたは楽しかったですか?」について各質問にどのくらい当てはまるかを選択し、自由記述欄、全体の感想欄に記入する形式のアンケートを取り、学生がこのイベントを理解していたか、どのように感じていたかを集計し、まとめた。

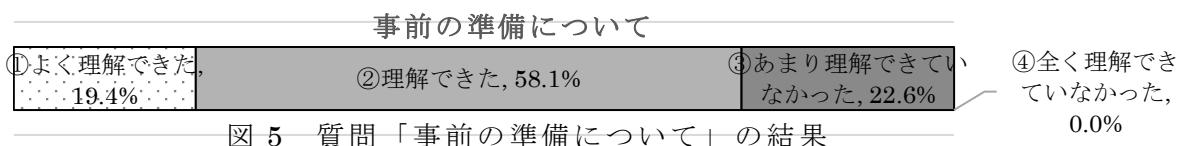


図 5 質問「事前の準備について」の結果



図 6 質問「参加者の方に作り方を教えることができましたか?」の結果

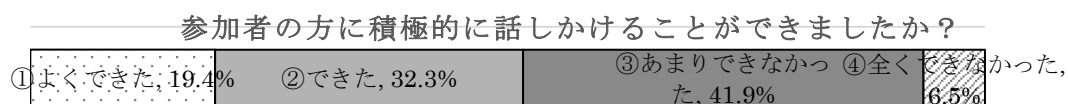


図 7 質問「参加者の方に積極的に話しかけることができましたか?」の結果

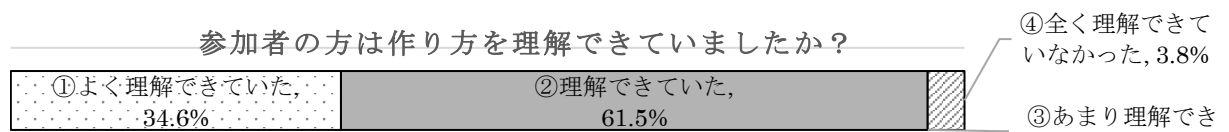


図 8 質問「参加者の方は作り方を理解できていましたか?」の結果

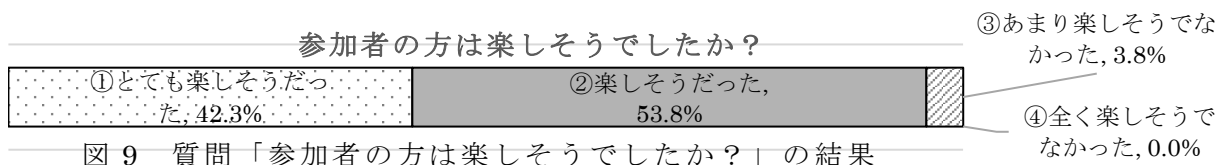


図 9 質問「参加者の方は楽しそうでしたか?」の結果

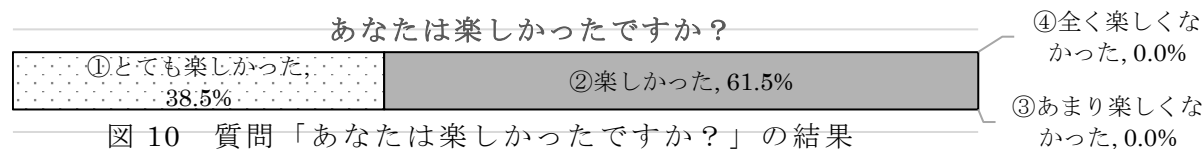


図 10 質問「あなたは楽しかったですか?」の結果

事前の準備において、クリスマス・リースの作り方を理解できていた割合は 77.5% であ

り、22.5%は理解できていない状態で本番に臨んだことになる(図5)。作り方は前週の授業内で練習したが、その日に欠席した学生があまり理解できていなかったと回答している。このような学生のために作り方の説明書を作ることも考えたが、説明書があるとわからないところがあっても周囲に聞かずに説明書を見て解決してしまう可能性があるため、作成しなかった。欠席した学生は別の時間に練習して作り方を理解しておく必要があったかもしれない。また、針と糸を使う作業であったが、参加者の中には男性や高齢の方もおり、苦勞されている様子が見られた。小さな子から高齢の方まで多くの方に気軽に楽しんで頂けるような新たなリースの制作方法を考える必要があると感じた。

「参加者の方に作り方を教えることができましたか？」については全体の50%が出来たが、50%は出来なかったようである(図6)。アンケート結果に「頭の中でわかっていることを言葉にするのは難しいなあと思いました」とあり、作り方は理解しているのに伝えようと言葉が出てこない等、わかりやすく教えることの難しさを感じたようである。また今回は学生の人数に比べて参加者が少なく、直接作り方を教えることが出来なかった学生もおり、より多くの方に参加して頂くことが今後の課題である。

「積極的に話しかけることができましたか？」については51.7%が出来たようであるが半数近くは出来なかったことになる(図7)。「人見知りなので話すのにとまどった」、「会話のネタが少なく、焦りを感じた」等、コミュニケーションに必要な「話題を集めておく」ことの重要性も感じたようである。初対面の相手に自分から積極的に話しかけることが出来ないと感じる一方で「知らない人なのに作業を共にすることで、自然と話せた」という意見もあり、皆で1つのリースを作ることが会話をするきっかけになったことがわかった。

「参加者の方は作り方を理解できていましたか？」については参加者の96.1%が理解してくださった様子であることがわかった(図8)。作り方は昨年と同じであり、昨年に続き今年も参加してくださった方が作り方を覚えていて、逆に学生が教わったこともあったようである。「参加者の方が縫うのが早くてついていくのが大変だった」という意見も見られ、お互い助け合うことでコミュニケーションが生まれていたことが伺える。

「参加者の方は楽しそうでしたか？」については、全体の96.1%が楽しそうだったと答えており、住民の方々は本学学生との交流を歓迎し、楽しんでくださっていることがわかる(図9)。「あなたは楽しかったですか？」の質問に対しては100%の学生が楽しかったと答えている(図10)。住民の方々は学生よりも年長で様々な経験や境遇を持つ方がいらっしゃり、話題も豊富で、クリスマス・リースの話から学生にとってためになるお話やこれまでに様々な経験をされたお話も聞くことが出来たようであった。学校や学生自身の話などをして、進路についてのアドバイス等もして頂いたようで、「嬉しかった」、「参考になった」との感想も見られた。作り方を上手く教えることが出来なかったり、思うように話しかけられなくても、コミュニケーションを取りながら制作をすることに楽しさを感じ、また参加者の方が楽しそうで完成した作品を喜んでくださった様子や「また来年も参加し

たい」と言ってくれたことも嬉しく、楽しいと感じたようであった。

まとめと今後の課題

地域住民の方々との交流を目的とし、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業等を通して、学生が様々なイベントを企画し、実行した。「イベント・プランニング」、「イベント・マネジメント」の授業では、学内イベントの企画から実施までを実際に行い、イベントの企画・計画の役割や構成内容、手法等についてイベントを通して授業内容の理解に繋げることができた。またこの学生企画によるイベントを通して、コミュニケーションの活発化も見られた。コミュニケーション能力を向上させるためには、普段話さない人と話し、話す経験を積むことが必要であるが、この授業内での取り組みによって学生は自然とこれらの行動を取るための努力をし、実際に行動を取り、コミュニケーションの重要性は理解したと言えるのではないかと考える。したがって、こうした活動はコミュニケーションの能力を向上させるための育成ともいえる取り組みとなっているのではないだろうか。文化表現学科は選択授業が多く、学生同士は仲のいいグループで行動することが多い。クラスメートの顔と名前が一致していない、ほとんど話したことがないという学生も多く、また1年生と2年生が交流する機会もほとんどない。授業でイベントを実施し、関わらざるを得ない状況になることで学生同士が交流する機会が多くなり、それによってコミュニケーション能力は向上していく可能性もある。初対面やあまり話をしたことがない人に対し、学生が自分から思いきって声をかけるそのもう一歩の勇気が出ずにコミュニケーションの機会を逃している場面を見てきた。これらの活動がコミュニケーションを取ることの楽しさや取り方を学んでいくきっかけとなることが出来ればと考えている。

新所沢団地自治会は地域活性化に力を入れており、活発に活動を行っている。本学との交流にも積極的であり、提案を快く受け入れてくださる。本学とのこのような取り組みによって地域活性化に貢献できているかどうかはわからないところがあるが、地域住民の方々が本学の学生と関わる中で他にはない何か新鮮なものを感じたり、話題を提供出来ているとするならば、それも地域活性化の1つであり、地域活性化に貢献出来ているのではないかと考える。毎年3月末に行われる桜まつりにおいてはワークショップでこれまでに3回参加し、七夕リース制作も今年度で3年目となり、クリスマス・リース制作も3年目を予定している。また、他の授業の履修学生が制作した「ポケットティッシュケース」を「ぐりーんぽけっと」において販売しているが、大変好評ですぐに売り切れてしまい、追加注文を頂いている状況である。新所沢団地自治会とのイベントを通しての交流は定着しつつある。「ぐりーんぽけっと」での本学学生によるボランティア活動が途絶えていたが、ここ数年で少しずつボランティア活動参加者も増えてきている。今後もこのようなイベントを実行し、イベントを定着させていくことで生み出される効果にも期待したい。

今後の課題は、コミュニケーション能力の向上についての評価の方法である。アンケート

ト等による自己評価では、認識に違いがある可能性があり、曖昧な部分が多くなると思われる。コミュニケーション能力がどのように向上したのか、その効果の判断方法が非常に難しいため、今後検討していきたい。学生のコミュニケーション能力を向上させる一助となるように、このような活動を継続的に行っていきたい。

末筆ながら、ワークショップに参加者して下さった方々、いつもイベントの提案を快く受け入れ、協力して下さる新所沢団地自治会長古屋俊昭様をはじめ自治会の皆様に感謝申し上げます。また、ワークショップにスタッフとして参加してくれた学生、「イベント・プランニング」、「イベント・マネジメント」の履修学生に感謝申し上げます。

註

- 1) 梶原貞幸編著『イベント・プロフェッショナル I』, 社団法人日本イベント産業振興協会, 2012年, p.9,
- 2) 一般社団法人 日本経済団体連合会『2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果』, 2018年, p.2
- 3) ダイドー働く大人力向上委員会, 『社会人の職場コミュニケーションに関する意識調査』, 2014年, <https://www.atpress.ne.jp/news/46093> (2018年10月閲覧)
- 4) 経済産業省, 『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』, 2010年, p.7-p.9
- 5) 加藤里美他, 『コミュニケーション能力に関する企業と大学生の認識のギャップ』, 日本経営診断学会論集 16, 2016年, p.75
- 6) 白鳥絢也, 『アクティブ・ラーニングを意識した「教育課程論」の授業スタイルに関する研究』, 常陽大学教育学部紀要, 第37号, 2017年3月, p.201-212
- 7) 谷本英彰, 『教職志望学生のチームワーク能力向上を意図した体育実技授業』, 大阪産業大学人間環境論集 16, 2017年3月, p.189-197
- 8) 丸山和幸, 『ビジネス現場で求められる「コミュニケーション能力」の養成に向けて』, 研究紀要青葉, 第9巻第2号, 2017年, p.55-66
- 9) 藤本光司他, 『ものづくりを通じたコミュニケーション演習が主体性におよぼす効果—社会人基礎力育成と接続教育の視点より—』, 日本教育情報学会第27回年会, 2011年, p.274-275
- 10) 文部科学省, 『用語集』, 2012年, p.37, 「アクティブ・ラーニング」
- 11) 経済産業省, 『社会人基礎力』, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2018年10月 閲覧)
- 12) ひなぎく著『いちばんやさしい つまみ細工の手習い帖』, ナツメ社, 2016年
- 13) 文化出版局編『型紙をなぞって焼くだけでできる プラバンアクセサリ』, 学校法人文化学園 文化出版局, 2013年